



神門が開いた時、真正面に神殿があるのは全国でも熊野本宮大社のみです。目の前に神様が現れることを意味し「心の門」と呼ばれています。

人々を惹き付ける熊野信仰の拠点

「熊野本宮大社」



大斎原の大鳥居

熊野三山の一つ、熊野本宮大社は、もと大斎原と呼ばれる、熊野川とその支流の音無川・岩田川が合流する中州に鎮座していましたが、明治22年の大水害によって倒壊流出したため、同24年に現在の場所に遷座しました。御祭神は「熊野十二所権現」と呼ばれる十二柱で、主祭神は「家津御子大神」です。大斎原のイチイの木に、神が三体の月となって降りたという伝承から、信仰の起源が自然崇拜にあると想像されます。

熊野の大自然に霊威を感じた古の人々は、始めにそれを土地の神として祀ったのですが、熊野を修行の場と定めた修験者たちの働きもあり、熊野に対する信仰が広まっています。



桐唐草双鏡
瑞祥を表す亀や鶴を配し、下方には五三桐の桐唐草文を大きく表した和鏡で、技法から室町時代後期頃の製作といわれています。



鉄湯釜
源頼朝公が奉納したもので、奈良東大寺所蔵の「鉄湯船」に次ぐ日本で二番目に古い釜です。湯立神事に使用していたものと考えられています。



牛王と起請文
本宮神職の各家で取り決めごとを交わした起請文です。冒頭には熊野古来の御札「熊野牛王神符」を貼り付けています。



剣（銘：上野大掾國益）
密教で山中を駆け回る修行の折に護身用として使用したもので、現在でも修験者が護摩法要を営むときに法具として用いています。

現在だからこそ
求められる熊野の役割



熊野本宮大社 宮司
九鬼 家隆さん

創建2050年の歴史を刻んできた熊野本宮大社は、熊野三山の一つ。それぞれの神社は時間的な意味合いを持っており、熊野速玉大社は「過去」を表し、過去の自分を見つめ考える場所。熊野那智大社は「現在」。今の自分の立ち位置をしっかりと確認する場所。そして熊野本宮大社は「未来」。未来に向かって祈りをささげる場所であるといわれています。

熊野本宮大社は、地域にとってどのような存在であり、今後どのように関わっていくのかを、熊野本宮大社の宮司 九鬼家隆さんに話を聞いてみました。

「熊野は古来より『甦りの地』『再生の地』と言われる。その中で熊野の役割は祭りなどを通じて人々に元氣を与え、気持ちのよりどころとなる場所であることです。令和3年は、3月に東日本大震災から10年を迎え、また同年9月には紀伊半島大水害から10年という一つの大きな区切りの年であります。さらに、令和2年から世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスが今もなお人々を苦しめています。現在だからこそ、一歩でも半歩でも『前』に向けて歩んでいただきたいと思います」

According to Ietaka Kuki, the head priest of Kumano Hongu Taisha Grand Shrine --"Kumano has been called the land of 'resurrection' and 'regeneration' since ancient times and it is a place where many people feel at ease and revitalized. Now, with COVID-19 rampant all over the world, even if they must take baby steps, I hope that people can keep pushing forward."